
表裏

秋空

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

表裏

【Nコード】

N6701C

【作者名】

秋空

【あらすじ】

世界は表と裏。それを知る者は限られている。ヴァリ。世界の理を知る一人。アーク。ヴァリに大切なモノを奪われた被害者の1人。秋空愁。表で平穏に暮らす高校生。アークが愁と出会う事で物語が動き出す。

1の表裏

「やはり足りない・・・」

何度数えても・・・だ。おかしい。

「攻めてきた時6人居たはずだが？」

声にだしてから自分に問い掛ける。周りを見ても『生きた』人間の姿はどこにもない。

闇に覆われた城の暗い暗い広間。いくら暗いと言っても、この死体だらけの部屋に1人立つこの城の主にとっては見慣れた風景であり、暗いほうが目が良く利く。

だが、いくらさがしてもだ。もう1人見つからない。

「逃げたか・・・？」

リーダー面して、私を見つけるなり私の名前を叫びながら突っ込んで来た男が？ここまでこれたほどの男が？仲間を犠牲にして？

「ありえない話ではないが・・・。可能性としては薄い」

人間が愚かしいことなど、この死臭漂う城の主は良く知っている。だが、復讐を糧に生きている人間がどれほど執念深いかもよく知っている。

この城の主は自分の禍々しいほどの黒い鎧と、黒い剣についた返り血に目をやる。

「ああ、また強くなってしまう・・・」

血は禍々しい黒に飲み込まれその一部になる。そして城の主は自身がまた、強くなるのを感じた。そして思う。

私を 殺せるものは いつになったら 現れるのか

その時既に城の主は1人消えた少年のことなど忘れていた。

「ロゼ!!」

奴の一閃はロゼを裂き、ロゼの胸からは赤い液が飛び散る。ロゼは鉄製の杖で防御していたのだが、そんなのはお構いなしだ。

もう3人目だ。貴重な回復役がやられた。そう、黒髪の男は仲間の女が目の前で殺されたのにも関わらず、それしか思わないのだ。
「よくもロゼを!ちくしょお!」

そう言いながら青髪の男は弓を射る。矢には氷の力を加え、放つ瞬間に光の属性の力を加える。二つの属性を含んだ矢は驚異的なスピード黒い鎧の男に向かって一直線に進む。

「ほお?」

黒い鎧の男は関心したような反応を見せる。二つの属性を操るというのは、誰にでもできることではない。黒い鎧の男はそれに関心したようだ。しかし、それだけだった。

驚異的なスピードの矢を右目に刺さる直前で左に避けてしまう。

「なっ!？」と青髪の男は驚くが、彼の意識はそこで途絶える。黒い鎧の男が右手に持つ黒い剣で青髪の男の首を胴体と切り離してしまったのだ。青髪と黒い鎧の男の距離は15メートルはあったはずだが、黒い鎧の男にとっては関係無い距離だった。

「くそ、早すぎて見えない」

白髪の男は腕につけたガントレットで黒い鎧の男に攻撃を仕掛けようと一歩踏み込む。

が、踏み込んだ瞬間黒い鎧男はガントレットごと腕を切り落とし、心臓を一刺しする。

「迷いが無いのは素晴らしいが・・・それだけだ」

黒い鎧の男は胸から剣を抜く。それと同時に白髪の男は地面に倒れこみ、胸から吹き出る赤い液で白い髪を赤く濡らしていた。

まずい・・・このままだと俺も死ぬ！

残り1人となった状況を確認するのに1秒も掛からなかった。彼は黒い鎧の男に相当の恨みを持っている。こんな所で死ぬわけにはいかないっ！今は勝てなくても、いつかはっ！

そう頭の中で判断した瞬間、彼は左手で首にかけてある水晶のペンドラントを引きちぎり、砕いた。

必ず 俺の手で 殺してやる

水晶から発せられる黒い渦に飲まれる瞬間、黒い鎧の男の背中を睨みつける。音も無く消えようとする少年に黒い鎧の男は気づかない。

かならずソフィーの仇は討つぞ。『ヴァリ』！！

そこで、少年の意識は途絶えた。

1の表裏（後書き）

はい。秋空です。

いろいろ、自分のPCに小説を書きながら、初めて投稿しました。いろいろな小説を読みながら、上達して、過去の話を楽しめるようになったらなあ〜と思っております。

リアルが忙しいので更新は不定期ですが、今後よろしくおねがいします。

2の表裏

俺は秋が好きだ。名字に入ってるからとかではなく、単に好きだ。

「平凡で平和が最高」

窓際の席に座る少年は窓の外に広がる空を、独り言を言いながら眺める。

「そつだな平和なのは最高だね。秋空」

教科書片手に近づいた男が秋空の頭を、その教科書で叩く。

「まったく。平凡なのはいいが、授業は集中してくれないと困るぞ」
その発言が終るのを見計らっていたかのように、授業の終わりを告げるチャイムが校内中に響き渡る。

「おい、愁。まったくのナイスなタイミングで怒られたな！」

そう言いながら短い髪をツンツンに立てた小柄な男がニヤニヤしながら愁の席の近くによる。

「故意じゃないよ」

そう弁解する愁は頭をぽりぽりかく。どうやら癖のようだ。

「故意じゃない所が皆の笑いを誘うんだよ。ところでさ、今日暇？」

「いや、今日は真っ直ぐ帰るよ。体育で身体動かしすぎて疲れたよ」
愁はそう言いながら首の骨をポキポキ鳴らす。運動神経の抜群に良い愁は体育の時などよく活躍する。今日はサッカーだったのだが、50分間活躍していた。

「ちえっ、何でも軽くやってのけるから、俺の活躍の場がねえじゃねえか」

「悪態つくなよ。海士だって活躍してたじゃないか」

「1番じゃなきゃ女にはモテねえよ」

そう吐き捨てると鞆を持ち直しドアの方に歩き、そのまま帰ってしまった。

誰もいなくなつた教室でぼんやり空に目をやると、既に蒼い空ではなくなっていた。

愁は自分の鞆をもって1人教室を出た。

外では運動部が声を出しながら各々の部活の練習に励んでいた。

何事にも熱くなれず、運動でも勉強でも特に努力をしなくても凡人以上。故に愁は少しこの世界に飽きていた。

なので部活にも入らず、彼女も作らないで毎日をダラダラ過している。

（今日は家に帰ったら速攻で寝よう）

身体の疲労を感じていた愁は足早に白石高校を後にしていた。

愁の家は学校に近く、徒歩5分だ。愁の部屋は2階にあるので、

窓から校舎が見えるくらいだ。

（今日もつまらなかった）

鞆を置いて窓から学校を見つめる。今日も何も無い、つまらない日常だった。

愁は学校を見ているのにも飽きて、ベットに倒れ込みそのまま寝てしまった。

P M 5 : 3 0 愁 就寝

P M 7 : 2 4 愁 起床

P M 7 : 2 5 アーク 転移完了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6701c/>

表裏

2010年12月18日18時20分発行